

るのほな

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2011

千葉大学医学部同窓会報 第64号 題字 鈴木五郎

白く高く新病院完成迫る

様相変る亥鼻台

新病院落成近づく

昭和48年3月20日に起工された新病院は、オイルショックの時期を挟んで曲折を経たが、本年3月には病棟、外来ホール棟、エネギーセンター棟等が完成、近く外来病棟、母子センター、精神神経棟等が出来ることになり、地下2階、地上12階の白亜の新病院は来春1月14日に新築落成記念行事が行なわれることとなった。現在予定されているスケジュールでは開院式 昭和53年1月14日(土) 午前11時より(新病院大講義室にて) 祝賀会 正午より(新病院玄関ロビーにて) となる。

新病院への移転について

新病院への移転がかなり大がかりなものになることは想像に難くなく、来年2月16日より28日までの間は外来診察が休診となる予定なので同窓各位においても御承知おき願いたい。なお新病院での診療業務は3月1日に開始される。

現病院はどうなる

現在使用している附属病院が建築物として価値のあるものであることは多くの人々の認めるところ

である。かつては取りこわしか改修利用かの両面より論じられたこともあったが、撤去のためにも、改修のためにも巨額の費用が必要であり、耐震構造や建築学上の意義等をも考慮すると改修利用が当を得ていると判断されて現在文部省に対し改修費その他概算要求中である。幸いに許可されればおそらく昭和53年度より2・3年の間に全面的に改修され、学生の講義室、実習室、基礎医学の各教室、研究施設、臨床の研究室等に利用されることになろう。そうだった暁は医学部は現病院と新病院の二つの建物に含れることになる。この両者の間には連絡道路があり、まさに連絡をどう密にするかが問題となろう。いづれにしても時流れて基礎医学研究室と臨床部門とがそっくり位置が入れ代ったのは興味深い。

今の基礎医学棟はどうなる

当然考えなければならぬ点であるが現在まだはつきりした計画の決定はない。しかし看護学部の拡張、図書館の拡張整備による利用、その他附属各学校による利用等が考えられるところであろう。生物活性研究所の完成、移転習志野に30数年すぎた生物活

性研究所(もとの腐敗研究所)は連絡道路南側のテニスコートの一角に美事な新築成つて去る10月29日落成式を挙げ完全に移転を完了した。(次号に詳細掲載予定) 亥鼻台には医学部の他に看護学部活性研等が存在することとなり新病院完成と共にまさに様相一変ということになる。凡秋谷の緑の保全、キャンパス全体にすめるべき植樹の件など環境づくりに同窓の皆様のお力添えをお願いしたい。

昭和五十二年度千葉大学 公開講座、盛況裡に終了

千葉大学が地域住民を対象として行なっている頭書の公開講座で今年は医学部が中心になって、七月二十五日から五日間開催された今年度の統一テーマは「くらしと健康」であり、基礎、臨床の多くの教官および、看護学部、生物活性研、教育学部の教官の協力のもとに、内容豊かに開催された。

主な内容は、日々の健康(第一日)母と子の健康(第二日)、成人の健康(第三日)、成人の健康(第四日)、心とからだの健康(第五日)と分けられて居り、それぞれの専門家によるわかりやすい講座に加えて、健康体操、応急処置、家庭看護の実習なども行なわれた。受講者は申込先着順(四〇〇名と昨年より大巾に増えたが、その約七割は家庭の主婦であり、多くは近親になんらかの形の病人をかかえているというところで、会場である教育学部F号館視聴覚教室の冷房も及ばないほど、熱心に聴講していた。なお、今回は講師陣の最も話したいことと、聴講者の最も聞きたいこととの間のギャップをうめるため、各講座の終りに対話の時間を設け、なかなかの好評であった。

第54回 千葉医学会学術大会 11月12日(土)開催

第23回千葉県医師会学術大会、第16回日医医学講座との連合大会は、11月12日(土)午後2時30分より医学部病材示説講堂にて開催された。

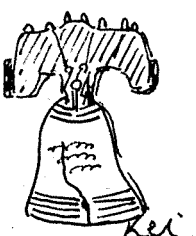
特別講演は県西部浜松医療センターの小張一峰院長(昭15年卒)の「腸管感染症の病態からみた治療の問題点」で病原菌の種類と感染の病態、化学療法の影響などにつき貴重な報告が行なわれた。また検査部の小林章男助教授(昭31年卒)の司会により「感染症治療の実際」につき各科の間で討論が行なわれた。

お知らせ

千葉大学医学部百周年記念事業の一環として、鋭意編集之中であった「百周年記念誌」が、本年末に発刊の運びとなりました。

本誌は先年刊行された「千葉大学医学部八十五年史」につづくものとして、各講座などのその後の十五年の歩みを載せる一方、運動部、文化部などの略史、百年の年譜などを盛り込んであります。

当初四百頁以内のものとして計画しましたが、原稿や写真が多く寄せられ、六百頁を越えようとしています。十月末日の予約申込み切には、申込部数千四百を超えました。なお多少の余裕を持って印刷させてありますので、十一月以降でも早目にお申込の方にはお返けできと思います。ただし十一月以降お申込の方は一冊三千元(送料別)となりますのでご了承ください。(編集委員会)



の は な 会 長 野 県 支 部

総 会 の 記

支部長であられた、丸山、竹内両先輩が相次いで他界されたから永らく開かれずに今日に至ったが、去る六月十八日(土)香月学長を迎えて、百瀬孝男支部長のもとに松本市で行なわれた。現在長野県には百名余の会員が各地の医師会の中心となって活躍している。千葉大出身の薬剤師並びにレントゲン臨床検査、看護婦などを加えるに相当の数にのぼる。当日は雨天のため出席者は三十名であったが、来賓として加藤信大学長と小穴松本市医師会会長が出席され、錦上花を添えていただいた。新装な



つた松本医師会館における「かん

東京の は な 会

定 時 総 会 開 催

昭和五十二年東京の は な 会定時総会が、七月九日午後三時三十分から銀座東急ホテルにおいて開催された。出席会員四十八名、ほかには大塚の は な 会会長、萩原増玉の は な 会会長代理、大学からは佐藤病院院長、萩原、嶋田、山口四教授をお迎えして定刻に開会した。本年は、特別に議すべき案件もなかったで、型の如く庶務ならびに会計報告のみを行なうて総会を終わり、小憩後、日赤医療センター小児科部長の川崎富作先生の学術講演「小児の熱性発疹性疾患について」に移った。講演は

川崎先生の独壇場の観のある川崎病を中心として、これとまぎらわしい小児の熱性発疹性疾患について、スライドを使用しつつ、具体的かつ詳細に臨牀的知見を述べられ、ついに所定時間をオーバーするほどの熱演であったが、われわれ臨牀医にとって裨益すること多大な講演であって、講演後の会員の好評の声を耳にして、計画した当事者としても、いささか鼻の高い思いがした次第であった。つづいて、別室において松村副会長の司会で懇親会のパーティに移ったが、大塚の は な 会会長の

の外科的療法と化学療法の考え方」という香月学長の講演は、開業医のわれわれにもわかり易く、一同感銘をうけた。講演後は民芸調の「しづか」にて懇親会がもたれ、母校の現況、特に新病院と研究施設についての説明があり、また信州大学との関係などについて学長より詳しく話をうけたまわった。会員より沢山の懐しい話が出、運動場、連絡道路の昔などを語り楽しい一夜を過ごした。出席者と当日の写真を添えて報告致します。

出席者

下島亮二(大12)、北原義張(大13)、竹内丈夫(大14)、百瀬孝男(昭6)、高山茂樹(昭12)、

ご挨拶のあと、佐藤病院長からは本年末頃の新病院への移転、さらには、その後の設備の充実、人員配備の充実など、内外にわたる頭の痛くなるほどの数々の難問を抱えてはいるが、フアイトをもちまして、この重責を果していききたいと、決意のほどを述べられた。また、の は な 同窓会員の一人である福島茂夫参議員候補のご子息より同候補に対する同窓会の絶大な支援に對して感謝の言葉を述べられ、懇親会は、久々に出席の高島克己大先輩の音頭にて祝杯をかわしてから始まり、美酒佳肴豊富であり、気のきいた美女のサービスありで、時の移るのを忘れて先輩後輩の別なく、なごやかな歓談に時をすごして、午後七時半頃盛會裡に会を閉じた。

(昭13卒・久保田正助 記)

(東京の は な 会副会長)

野沢保光(昭14)、横沢泰夫(和14)、藤森邦俊(昭16)、矢沢武(昭16)、武田浩(昭18)、山田悦朗(昭18)、森川不二男(昭19)、亀子宗平(昭20)、小林滋(昭22)、中村信正(昭22)、藤森英雄(昭22)、小西義男(昭23)広瀬毅(昭24)、松岡伊津夫(昭24)、土手内守人(昭26)、松野淳治(昭26)、原恒男(昭27)、木家豊美(昭30)、古屋大雄(昭30)、塚原重雄(昭36)、栗林士郎(昭39)、小島莊明(昭40)、笠井安陵(昭42)

(卒業年次順)

(昭18卒・武田 浩 記)

昭和28年卒

ク ラ ス 会 開 催 さ る

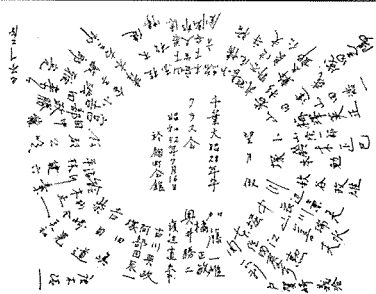
昭和52年7月16日(土)午後四時より東京都千代田区平河町翔町会館において同級会を開催した。本会は去る昭和48年に卒業20周年記念会を持つてからのものであり、今回はとくに金子敏郎君が本学耳鼻咽喉科教授に昇任したのを機に祝賀会も含めて行なわれた。当日は写真の寄書の通り49名が集り、同君の教授昇任を慶び、今後の活躍を期待し極めて盛會であった。28年卒は金子君のほか赤松君(聖マリアンナ医大・生化学教授)小幡裕君(東京女子医大・内科教授)窪田靖夫君(富山医大・眼科教授)成田光陽君(筑波大・内科助教授)・山田達哉君・水口信君(国立がんセンター部長)・関正利君(放医研部長)等各方面

昭和43年卒クラス会

時に仲間が集まると、きまづてクラス会でもしないか、などと誰からともなく言い出す。そおだな卒業してもう足かけ十年にもなるのかと思う。学生生活の懐かしさが思い出される。新幹線、東京オリンピック、ビートルズ、五木寛之、大学祭、サークル活動、クラス活動などなど。又卒業前後の二年間は非常にあわただしく、この間の記憶は何と大きく、重いもので

で大いに活躍しておられることは御同慶の至りである。なおこの会の設置その他について小波雅亮君にお骨折載したことを申し添えておく。

(昭28卒・奥井勝二 記)



であろうか。卒業試験ポイコット、国家試験ポイコット、43研修医団体結成、青医連結成、学部長室占拠、卒業一年間の自己研修などなど。そしてなつかしい顔が思い出される。大学内においても、なかなか会う事が出来ないから、まして開業した者、出張中の者、他大に行つた者には、全くといってよい位会えない。ちらつと聞いた噂話も真実味を増すものだ。大学の廊下を飛びまわっている、岩間、北原、栗山、千葉が幹事となり、七月十日、ほてい家で卒業後十年目の同窓会をもつことになったのは六月の晴れた午後。当日は昨夜の雨も晴れ上がり、午後二時集合。三々五々集まる連中に話しの輪が出来る。挨拶もそこそこ。話がはずむ。出席者約五十名全員の自己紹介、家族連れのナロン、除夫妻、アメリカ帰りの堀川君、第一生理学助教授昇進の神田君などなど、欠席者の葉書による近況報告。そして記念撮影は、卒業アルバムに手腕をみせた名カメラマン、長谷川(伴)、園部両君。二次会は暮れなずむ米町ののんだ、幹事は順天堂内科に行つた古山君。無礼講だよ。時間のたつのが速い。次回は開業した伊藤、木村君も盛大にやろうと勝手な約束をし、栄町のネオンが一段と華やいだ頃、再会を期して解散す。(文責、岩間、北原、栗山、千葉)

国立横浜東病院だより

院長 上野 高次

晴れた日には西に富士、東に房総半島を遠望する横浜市のほぼ中央、保土ヶ谷の丘の上にわが国立横浜東病院は位置し、古い東海道宿場の名残りはもはやとどめるべくもないが横須賀線の保土ヶ谷駅で降りて十分ほど歩いたところにあります。当病院は国立横浜療養所から昭和43年に国立横浜東病院として新しく出発し、療養所時代からその発展に努められた雨宮孟先生(昭4卒)のあとを受けて国立病院としての再出発にスタッフ一同専心している次第です。

昭和47年度より施設整備を開始し昭和51年7月総合病院として面目一新し52年4月には落成の運び

機能をもった病院であるべきでしょう。中小病院の良さの一つは医師団が各診療科の壁を越えて常に全員が協力し合って一人の患者の診療に当れることだと信じて居りますが幸にこの良さを充分に組み込んだ診療体制で明るいいつも笑い声の絶えない医局であることを誇りに思っています。しかしその中から常に一歩先に進もうとする意欲あふれる若い人たちが共に楽しい毎日の診療に明け暮れて居ります。そのうちには臨床研究の面でも大学と肩を並べるだけの力を持った病院にしたいものと高野副院長と常々話し合っています。

しかしまだまだ人的な面でも、医療設備的な面でも今後待つ点が多いので、一層の御後援と御教示を期待して居ります。

現在のものは同窓会員は、産婦人科に副院長の高野昇(昭31卒)と吉田哲夫(昭40卒)、園田俊雄(昭44卒)、内科に三木亮(昭38卒)唐沢偉雄(昭46卒)、呼吸器科に田中進(昭18卒)、胸部外科に坂井程夫(昭24卒)、外科に東紀男(昭34卒)、天野勝弘(昭41卒)、整形外科に森田清(昭42卒)、眼科に松田至郎(昭25卒)、皮膚科に高野元昭(昭40卒)の諸先生です。これから出る若き優秀な後輩たちのためにもがんばりたいものです。

市川重平先生の米寿記念出版祝賀会開かる

るのは同窓会の役員として、永らく本会の発展に尽力されてきた市川重平氏(大正元年卒)は、昨夏米寿を迎えられた。このたび、それを記念し随筆集「幕間」を刊行された。

これは小林魯江氏が主宰する世味調査研究所機関誌特報に、先生が折にふれて掲載された随筆を、長井和行氏(昭和二十四年卒、現千葉県衛生部長)が中心となって発刊を企画、準備され、北村、武松本、胖両名誉教授、小林金市県医師会会長、橋本鍾爾(大正元年卒)、花岡和夫(明治四十四年卒)

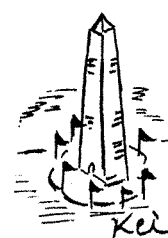
の諸先生が実行委員として参加、実現に努力され、遂に発刊の運びとなったものである。

六十一篇の各篇は先生の来し方そのものの表現であり、また現在日赤千葉県副支部長、公衆衛生協会会長などを歴任されている関係上学校保健、公衆衛生関係の所感を述べられた文章が多いが、先生の鋭い社会感、倫理感が各篇に充ち溢れ、読者の心を打つ。また「医大の百周年」と題する一篇を始め各所に本学の歴史を辿るものにとつて貴重な資料となる内容が含まれている。

なお祝賀会は千葉県衛生部の御尽力で昭和五十二年七月二十七日千葉県共済会館で行なわれたが、鈴木五郎、小林竜男、松本、小林金市各先生を始めとするのは同窓会の諸先生、知事、市長その他政界、財界から多数が参集され、極めて盛会であった。

だから、扇風機やクーラーの部屋でアイスクリームを食べ、テレビを見てギターを弾きながら、ストライキをするような国賊、税金泥棒の後輩が出た事は、悲憤遣る方なし。大半がそろそろ六十才を迎える老眼生となり、孫を有す者も出てきた。同級会もこの頃は地方在住者に御願いし、一昨年は富山の橋君の骨折りで黒四ダムで、昨年は福島山口君の労を得て会津に、今年は川崎の由井君主催で伊東「はとや」に会し、観光班とゴルフ班に分かれて九月十七、十(次頁下段へつづく)

こ だ ま



(筆者は昭23卒)

昭和二十年卒業同窓会の記

9月17・18日 伊東にて

昭和二十年卒は旧制高校を丸々三年間勉強できた戦時下最後の学年だが、大学は短縮されて丸々三年間であった。

四月入学の日に解剖ラテン語を薄暗くなるまで鈴木重武教授に教わってから、七月三十一日までで一学年を終って、八月四日まで一

の宮殿舎で野営。八月十日から第二学年を開始し、猛暑の教壇から組織学の森田教授が目に入つて転落したり、生理の鈴木教授が上半身裸体ステコ一枚で汗を拭き拭きの講義などで、教える側も教わる方も共に苦勞を分け合つて日曜以外の毎日午後七時頃まで講

良い医師を育てるための献体運動

—第二十三回白菊会総会開催さる—

嶋田 裕

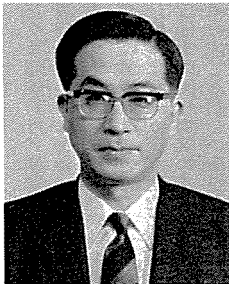
去る十月一日、東京虎の門ホテルで白菊会総会が、本学が当番校で開催された。そもそも本会の発足は、現白菊会会長の御尊父が、医療の恩恵により一命をとりとめ、健康を回復したよろこびから、昭和二十六年紹介されて東大解剖学の藤田教授を訪問し、全国の大学で教育用の遺体不足に困っていることを知り、死後の遺体提供(献体)を約束したことに始まる。以後この運動は全国的に発展し、毎年秋には会員の総会を開催するようになり、今年で二十三回目を迎えたのである。

ご案内

第二回るのはな美術展が左記のように行なわれます。ふるってご参加下さい。

○場所 横町ギャラリー
東京都中央区八重洲一の八の一七、新横町ビル4F(東京駅八重洲口前)、電〇三二七二一七六五
○期日 昭和五十二年十一月二十六日(土)三十日(水)、午前十一時午後六時
○オープニングパーティー 十一月二十六日(土)午後四時より

千葉大学保健管理センター所長に 木下安弘教授就任



千葉大学保健管理センターの教授増員が認められ、部局長会議での選考の結果、第3内科木下安弘助教授(本学昭28年卒)の就任が

決定し、同時にセンター所長の交代が行なわれた。木下教授は就任の抱負を次の如く述べられている。



木下安弘

本会への入会の動機には、前述のように医療の恩恵に感謝し、それに報いるために献体をしたという場合が多い。また自分は誤診を受けて苦しい思いをしたが、もう誤は繰返してほしくない。そのために医療の荒廃を救いたい。そのために献体をして、良い医師を育ててもらいたいという人もいる。入会の動機はともあれ、願いは十分な数の遺体で良い医学教育をほどこし、後世に良い医学、医療を残してもらいたい。また解剖学教授は遺体収集にわずらわされることなく、本来の教育、研究に専念

できるようなになってもらいたいということである。
総会では献体の正しいあり方を全国的に徹底し、医学の恩恵に報いるという献体理念の普及を図り、さらに献体すること、医学教育に参加することを認めてもらい、良い医師を世の中に送り出してほしいという会員の願いを大学の先生方に聞きとどけてもらえるのではないかと願っている。現在会員数は五千名強。文部省は二人の医師生に一遺体の解剖を基準としているが、それに満たない大学が多い。頼りは篤志家で、死亡率を二〇程度とみると、約二十万人の会員が目標で、はてな道をたどっている。
(筆者は第一解剖学教授)

助産婦学校開校二十周年を祝う

高見澤 裕吉



医学部付属助産婦学校創立二十周年記念式典が爽やかな秋晴れに恵まれた10月1日(土)、千葉市内のほてい家において小林金市県医師会長、川代賢県衛生部医務課長、宮入看護学部長ら多数の来賓臨席のもとに盛大に行なわれた。席上、前学長長久保政次氏、および初代教務主任上野野一子氏に対し、本校教育の発展に尽した功績により感謝状と記念品の贈呈が行なわれた。

式典後、「母子衛生の動向とこれから」の助産婦」と題する厚生省談に花が咲いた。
思い起こせば本校は、昭和二十三年に新たに制定された保・助・看護法に基いて、当時の岩津俊衛産婦人科教授(現名誉教授)をはじめ、総看護婦長、病院関係者らの永年に亘るご尽力により、昭和三十三年に開校の運びとなった。初代学長には御園生雄三産婦人科教授が就任、以後長久保政次前小児科教授、次いで高見澤裕吉産婦人科教授が学長に就任し現在に至っている。この間一九二名の卒業生を母子保健医療の場へ送り出して来た。

(前頁より)
八日の土、日を楽しんだ。富山の時から、鈴木正夫教授の夫婦同僚同級会を羨とし、同伴を呼掛け、次第に増えてきた事は楽しき倍増なり。
級の主要者は、佐藤博君(千大外科教授、病院長)、渡辺昌平君(千大肺内科教授)、川村明義君(東大医科細菌学教授)、加納六郎君(東京医歯大医動物学教授、医学部長)、白壁彦夫君(順天堂大内科教授)、窪田博君(千大一外吉講師)を始め、最近亡くなった多摩生全園長、新井正男君、そのほか各界に著明活躍者多く、まづは千大の中堅学年といつてよからう。
(川島恒二・記)

編集後記

この二十年の間、助産婦教育の使命も時代と共に変遷し、昔日の助産技術の修得を目的とした時代から今日の母子保健管理の指導に重点を置く時代へと進んでいる。このため、教育内容も高度化し、近代医学の洗礼を受けなければ一人前の助産婦として通用しなくなってきた。創立二十周年を迎えた今日、時代の一つの区切りとして、もう一度時代の要請している助産婦とはどのようなものか、又それを育成する最善の教育形態はどうあるべきかを考え直す必要があるのではなかろうか。

●今日から十一月である。異常なあたかきの中で大学祭がさきやかに行なわれている。かつては生き生きとした大学の秋の行事であったことを思うときさびしいというより情けないように思う。
●われわれはある日ある時突然に飛躍できないように運命づけられているので、やはり一日一日をどう過しているかが問題になる。大学の毎日の積み重ねの上にすばらしい大学祭が開かれるようになってほしいと思う。

最後に、創立二十周年記念の諸事業に惜しみなき御協力を賜った病院ならびに医学部関係各位に深甚の謝意を表します。
(筆者は産婦人科教授・千葉大学医学部付属助産婦学校長)

●この会報もお蔭様で着実に年4回の刊行が続いている。何時かわれわれのさきやかな努力が、同窓会の皆様の日頃の御好意にお報いできるものになることを祈っている。
(村山)